

## 遠距離介護から見えてくる「介護」の真実

—パオッコ活動現場より⑦

NPO法人パオッコ「離れて暮らす親のケアを考える会」 太田差恵子

ある日のパオッコサロン（月1回土曜日の集まり）に参加された女性。故郷でひとり暮らしをされていた父親（80歳代前半）が、昨年脳梗塞で倒れ、左半身にマヒが残ったとのことでした。医師から「左側に関しては、これ以上の回復は見込めません。右側のリハビリを頑張ってもらい、なるべく自立した暮らしをめざしましょう」と言われたそうです。

けれども、その後老人保健施設に転院したものの、そこでは右側のリハビリは行われず、父親の気力は衰える一方だということです。

彼女は遠方に暮らしています。彼女のごきょうだいが比較タイム勤務。自宅に連れ帰れば、母親によけいに不自由な思いをさせることになるでしょう。病院や施設を転々とする間に、ようやく「ずっと居ていいですよ」という病院に出会ったそうです。遠方でしたが、転々とするよりは同じ環境のなかには、ほうが母親の状態は安定するのではないかと思われ、その病院は、ケアが行き届き、入れ替わり立ち替わり、看護師などが病室を訪れてくれたそうです。男性は言いました。

「とてもケアは行き届いている

施設の近所に暮らしておられるので、頻繁に家族そろって、父親を見舞ってくださっているそう。とても仲の良いご家族なのだ、と思いました。

彼女としては、「右側のリハビリをもっとしっかりしてもらって、父には生き生きとしてもらいたい」との思いがあるそうです。でも、施設との打ち合わせなどは彼女のごきょうだいがしてくれており「もっと強く施設にお願いして」と言うことにもためらいがあるといいますが、なぜなら、そのごきょうだいは、頻繁に施設に行ってくれていますが、仕事もあるわけですから、介護状態が下がって、施設を出されることになる」とい

けれど、リハビリはしてくれませんが、でも、リハビリを頑張らせて痛い思いをさせるより、転院のない落ち着いた環境のなかで、心地よく生活するほうが、もしかしたら母にとっても幸せなのかもしれない」と。

冒頭の女性の「あきらめるしかないのかな、と思うんです」という言葉が気になりました。「あきらめる」という考え方は、どんな自分を追い詰めます。罪悪感を生んでしまうような気がするのです。

そうしたところ、その日サロンに参加されていた別の女性がいきました。何年も遠距離介護をして、現在父親は特別養護老人ホームに入居中です。「施設にお願いしたら、やってくれるかもしれませんよ。私は「こうしてほしいな」と思うことがあったら、施設に何度かお願いするようにしています。あとは、ごきょうだいが頻繁に施設を訪問されているなら、右手の動かし方をプロから教わって、それを

う気持ちもあるのかもしれないこと。お子さんもいて、仕事もあり、この状態で施設を出されたらどうしたらいいのだろう、との気持ちも理解できます。一方、彼女も「私が仕事を辞めて、実家に帰るわけにもいかないし」とも。「あきらめるしかないのかな、と思うんです」と大きなため息と悲しい瞳をされました。

この話を聞きながら、ずいぶん前に取材した男性のことを思い出しました。同じように悲しい瞳をされていたからです。その男性は、母親がひとり暮らしになってから実家に戻る形で同居をしていました。が、母親が元気なうちは彼の妻と母親

訪問の度にやってあげるだけでも少しは効果があるかも。あくまで素人の考え方だし、施設の専門家の方と相談したほうがいいけれど、それと「あきらめる」という発想は、全く「受け入れる」という考え方のほうがいいんじゃないでしょうか」と。

家族にも生活があります。親にいろんなことをしてあげたくても、できることとできないことがあるのは当然です。できることをやって、その上での現実には「あきらめる」のではなく「受け入れる」。私もこの考え方に同感です。

パオッコの別の女性会員ですが、両親を別々の施設に入居させた方がいました。入居に至るまでは、言うまでもなくさまざまな経過があり、自身に葛藤もあつたようです。何度も何度も帰省して、パートも辞め、自分が病気になることもあつたと聞いています。

「仕方ない」っていい言葉です。私はこの言葉のおかげで、やってこられました」とお

の関係がしっくりいかず、かなり険悪なムードになったそうです。それで、妻は働きに出るようになりまし。

しかし、その後母親は病気がけがを繰り返して、入退院の連続。じよよに自宅に戻れなくなりまし。かといって、病院も長居をさせてくれないため、病院や施設でも歓迎されず。一方、男性は母親がこういう状況になったのは、自分たちとのコミュニケーションがうまくいかず、確執を深めたことが一因だとの罪悪感をお持ちのようでした。

せめて病院や施設で、リハビリをしてもらって、もっと生き生きと暮らしてもらいたい、と願っておられました。そして本心は、自宅に連れ帰って、自分でリハビリなどの世話をしたいというものでした。

ですが妻と母親の確執が大きいうえ、そもそも夫婦ともフルしゃつたことが印象的です。「あきらめる」、「受け入れる」、「仕方ない」……。きっと、その状況ごとで、さまざまな葛藤と思い、言葉が心の中を交錯するのでしょう。でも、これらの言葉は似ているようで、微妙なニュアンスの違いがあります。

この原稿をここまで書いた翌日、名古屋での講演に出かけました。講演終了後参加者の男性に話しかけられました。母息子の2人暮らしで、介護中とのこと。「なんとかして、地域の人たちと交流してもらって、もっと生き生きとした生活をしてもらいたいんです」と彼。しかし、母親はどうしても閉じこもりがちになるそうです。

以前お会いしたケアマネジャーがおっしゃいました。「子が親を変えようと思うのは、至難の業。変えようと一生懸命になり過ぎると、子は消耗します。受け入れることも大切です」。

あきらめるのではなく、「受け入れる」。あらためて、大切なことだと思えました。

NPO法人パオッコ

～離れて暮らす親のケアを考える会～

親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。そんな状況のなか、親の心身に衰えが生じると子世代はどうしたものかと悩みます。パオッコは「ひとりの経験はきつとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有。ぜひ、ホームページに遊びにきてください！

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-37-8  
本郷春木町ビル9F インキュベーションハウス内  
ホームページ <http://paokko.org>